

## 肺がんの種類

肺がんは「非小細胞肺がん」と「小細胞肺がん」の2種類に分けられます。

### 【非小細胞肺がん】

小細胞肺がん以外の肺がんの総称で、肺がんの80～85%を占めています。腺がん、扁平上皮がん、大細胞がんなど多くの異なる組織型があり、発生しやすい部位、進行速度、症状などはそれぞれ異なります。

### 【小細胞肺がん】

肺がんの15～20%を占め、脳や肝臓、リンパ節、骨などに転移しやすく、一般的には進行の早いがんと言われています。

分類	組織型	特徴
非小細胞肺がん	腺がん	・肺がんの中で最も多い ・女性に多い ・症状が出にくい
	扁平上皮がん	・咳や血痰などの症状が現れやすい ・喫煙との関連が大きい
	大細胞がん	・増殖が速い
小細胞肺がん	小細胞がん	・喫煙との関連が大きい ・転移しやすい ・増殖が速い

## 症状

肺がん特有の症状はありません。肺がんの初期症状として、呼吸器の病気に共通する、咳が続く、呼吸困難（息切れ、息苦しさ）、胸の痛み、血痰などや、他のがんにも共通する発熱、食欲低下、体重減少などがあります。脳転移による嘔気、頭痛、麻痺、けいれんや、骨転移による痛みなど、転移した部位の症状が初発症状となることがあります。また、このような症状がないまま進行し、医療機関での定期的な検診や、ほかの病気の検査で偶然見つかることもあります。

原因が分からない咳や痰が2週間以上続く場合や、血痰が出る場合、発熱が5日以上続く場合には、肺がんを含めた何らかの病気である可能性が高くなりますので、早めに身近な医療機関を受診しましょう。



## 検査

検査	説明
胸部X線検査	肺にがんを疑う影がないか調べるために、胸部全体にX線を照射して撮影します。
喀痰細胞診	痰の中にがん細胞がないか調べる検査です。胸部X線検査では見つかりにくい肺門部のがんを見つけることができる可能性があります。
胸部CT検査	肺にがんを疑う病変がないか調べる画像診断法としては、最も有効な方法です。
気管支鏡検査	直径5mmほどの細いしなやかな内視鏡を、鼻や口から挿入して気管支の中を観察します。
経皮的針生検	がんが疑われる箇所まで気管支鏡が届かない場合や、気管支鏡検査で診断がつかない場合などに行います。
胸腔鏡検査	胸を小さく切開して、内視鏡を肋骨の間から胸腔内に挿入し、組織を採取して調べます。
がん遺伝子検査	がん細胞の発生や増殖に関わるがん遺伝子に異常があるかを調べる検査です。
MRI検査	頭部や骨などへの転移の有無を確認するためなどに行います。
PET/CT検査	肺がんが転移しているかなど、進行の程度を調べるのに特に有効な検査です。
骨シンチグラフィ	骨への転移の有無を調べる検査です。
腫瘍マーカー検査	がんの診断の補助、また診断後の経過や治療の効果を見ることを目的に行うことがあります。腫瘍マーカーの値だけでは、がんの有無やがんがある場所、がんが進行しているかどうかは確定できません。

## 治療

肺がんの治療には「外科治療(手術)」「放射線療法」「薬物療法」の3種類があります。どの治療法が適しているのかは、これまでの検査結果や身体的状況、年齢などもふまえて検討されます。

## 最後に

進行した肺がんの治療も、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤の登場により、飛躍的に向上していますが、早期診断によりさらに治療成績は改善します。早期に発見するには、無症状のうちから肺がん健診を受けることが大切です。年齢を重ねるとともに肺がんを含む病気のリスクも上がっていきます。特に肺がんにかかりやすい40歳以上の方は、毎年1回の肺がん検診は必ず受けるようにしましょう。また検診により「要精密検査(要医療)」と判定されたら、必ず、早めに受診するようにしましょう。